

附属  
特別支援学校

# 一人一人のニーズに応じる 「知の拠点」としての学校図書館運営

本校の図書館教育においては、知的発達に遅れがある児童生徒にも文化や情報を保障していきたいとの思いから、その活動の拠点である学校図書館の充実に力を入れており、学校図書館の利活用は学校の重点目標の一つにもなっています。昨年6月、本校が長年取り組んできた実践が評価され、全国学校図書館協議会より学校図書館賞を受賞しました。知的障害特別支援学校が受賞することは初めてのことでした。また昨年4月、文部科学省より「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」の通知が出され、スポーツや文化芸術活動等の取組の充実が求められているところです。本校のめざす障害者の図書館活用の推進は生涯学習の基盤になる取組と考えています。

学校図書館賞の受賞理由の中に、小中学校の特別支援学級の子どものための図書館活用につながっていくことを期待するとの一節がありました。本校の取組事例の中に一つでも、小中学校の図書館経営の参考になる点があれば、幸いです。来年1月には障害のある子どもたちの図書館利用を推進するためのセミナーを開催します。県内の小中学校にもご案内させていただきます。よろしければご参加ください。

**障害特性や発達段階に応じた  
わかりやすい環境整備**

- ・わかりやすい資料の分類と表示
- ・わかりやすい貸し出しと返却方法
- ・居心地の良い親しみの持てる環境設定
- ・プロジェクターと大型スクリーンの設置



**バリアフリー資料の充実と整備**

- ・バリアフリーコーナーと視聴覚ライブラリーの設置
- ・マルチメディア DAISY 図書の整備
- ・タブレット端末によるマルチメディア DAISY 図書の視聴



**読書の実態把握と  
個のニーズに応じた図書館サービスの提供**

- ・「読書カルテ」の作成
- ・読書傾向の実態把握（貸し出し図書の分類）
- ・児童生徒のニーズに応じた貸し出しやリクエスト・レファレンスへの対応



**学校図書館を活用した授業への参画と資料提供**

- ・学校図書館オリエンテーション
- ・授業実践の具体例の作成と紹介
- ・教職員への資料提供とブックリストの作成
- ・リライト資料、パスファインダーの作成と提供



■『附属研究ラウンジ』（FLPS）第2号をお届けします。今号の編集には、鳥取大学附属学校園の副校長4名が当たっています。■今号では、各校園の特徴的な取組（授業）を具体的にかなり詳しく掲載しました。中学校の「やりくり」の実際、小学校の授業づくりの3つの柱、幼稚園の「色水遊び」と思考力の芽生え、特別支援学校の図書館教育・図書館運営など、最近関係者から注目を浴び、評価をいただいている実践の場面を紹介しています。■子どもたちの活動の様子を見て、いつも心を動かされるのは、何かを発見したときのその生き生きとした表情です。言葉が口から出てくる以前の、心がそのまま躍り出たかのような表情は、まさに「素

池畔好日

心」と呼ぶにふさわしい、人間の活動の原点を示すもののように思われます。■私たち教育に携わる者のエネルギーは、子どもたちの「素心」の表情である、それを栄養としながら私たちは仕事をしている、とっては大げさでしょうか。私たちの学校園は、子どもたちの「素心」の表情であふれています。公開授業研究会、研究発表大会など、様々な機会にご来園、ご来校いただき、何かしらの発見していただければと願っています。■この広報紙は、県内すべての校種、すべての学校へ配布しています。また、紙面を電子データ化して附属学校部ホームページにあわせて掲載しています。お読みいただいたご感想やご意見をぜひともお寄せください。(S)

# FLPS

ふぞく研究ラウンジ no.2 発行：2018.7.15  
Fuzoku Lounge for Practical Studies 編集：鳥取大学附属学校園

「ふぞく研究ラウンジ」は鳥取大学附属学校4校園が取り組んでいる教育研究の「今」をお知らせする広報紙です。地域の教育関係者の皆様とともに地域の教育について考えるための「対話」の場を作りたい、という思いから昨年生まれました。ご意見・ご感想をお寄せください。

## 1. 中学校の研究「やりくり」

鳥取大学附属中学校では、「自立し、つながり、探究し、創造する力の育成」やりくりのたとえ「やりくり」という主題で研究を進めています。知識基盤社会といわれる21世紀では、社会の主体者としての自覚を持ち、変化の激しい社会に対応するだけではなく、新たな価値を創造していく力が不可欠であるといわれています。附属中学校では、このような中で、授業で知識を持たせるだけにとどまらず、知識を生かして新たな問題を探ったり、問題解決する方法を発想したりするような力をどのように育成するのか、考えていこうとしています。副題には、「やりくり」という言葉を使用しています。「やりくり」とは、持ち合わせの道具を用いて、直面する問題を解決していく営みです。この中には、人間がそれまで持っている知識を総動員して問題にあたり、新たな知識へと結びつけていく活動が含まれます。この「やりくり」という営みこそ、人間が「活用できる知識」を獲得する、重要なステップであると考えています。

こうした場合から、本校では、授業に「やりくり」の場面をいかに作るか、すなわち、生徒が思考して知識を獲得する授業をどうつくりだすのかをテーマにしてきました。奇しくも、学習指導要領改訂の議



## 自立し、つながり、探究し、創造する力の育成 やりくりのたとえ



（写真1）釘の固定方法をやりくりする

例として、「やりくり」する技術の授業を紹介いたします。1年生の木工で、釘を真っ直ぐ打つ授業について取り組みました。この授業では、「どんな道具を使っても良いから、とにかく木材に釘を真っ直ぐ打ち込もう」と、呼びかけます。子どもたちは、あれこれと相談しながら、様々な道具を持ちだし、真っ直ぐに釘が打てるよう工夫します（写真1）。「指で釘を固定してやってみよう」「うまく固定できないから厚みのあるもので挟んでみよう」「釘の各方面を固定しないと真っ直ぐ固定できないぞ」

## 2. やりくりのたとえ

論において、「深い学び」という言葉が出てきました。学びの深さは、知識の幅でもありません。知識同士がつながりを持ったなければならぬのです。つながりのある知識は、活動を通じた思考によって形成されます。まさに「やりくり」が必要なのです。

## 3. やりくりの先

本校では、このように「やりくり」する授業を各教科で行っています。その結果、生徒が自ら問題を捉え、解決方法を探る場面が各所で見られるようになっていきました。生徒会では、自分たちでディベート大会を企画し実施しました（写真2）。生徒会長が、議論ができる学校にしよう」と考え出したものです。教師が主導しなくても、自分たちで考え、自分の持っている知識を総動員して活動を創り出す。このような行為の原動力として、授業での「やりくり」が生きていくように感じています。

（写真2）ディベート大会の様子

